北条時頼ゆかりの寺　最明寺



金子根岸上にある最明寺は、京都東寺真言宗の名刹で、かつては松田山の山頂近くにありました。

この寺は、鎌倉時代の承久３（１２２１）年頃、浄蓮房源延という僧侶が建立しました。

源延は、源頼朝に仕えた伊豆の豪族加藤景員の三男、加藤左ヱ門尉実長という武将です。修業を重ね、学成るに及び伊豆山と鎌倉との間を往来して大いに浄土の法を説いたといわれます。いまでも伊豆に浄蓮の滝という名が残っています。

その後、北条時頼が灯明料として寺領１５００石を寄進して松田の最明寺（西明寺）は栄えましたが、鎌倉幕府が滅亡すると寺領はかすめとられ、そのうえ人馬の通行が困難なため、文明元（１４６９）年頃に現在の金子に移るようになったといわれています。



北条時頼坐像





善光寺如来堂

金子の最明寺は、別名相模善光寺とも呼ばれています。それは信濃（長野）の善光寺如来の分身、一光三尊善光寺如来をおまつりしているからです。

最明寺の開祖、浄蓮上人（源延）は、美濃の法住寺で一心に修行をしました。また、源延は、信濃善光寺の如来を深く信仰し、何度となく参詣していたといわれています。



善光寺如来堂

その後、源延は、伊豆山走湯権現の別当※となり、伊豆山と鎌倉との間を往来して大いに浄土の法を説きました。

源延はこのとき、夢の中で「阿弥陀の形を鋳造し人々の苦を救ってあげなさい」とお告げを受け、信濃善光寺へ行き、如来を図写し、如来の分身として金銅の仏像を鋳造しました。そして、松田郷最明寺（西明寺）に承久３（１２２１）年に安置しました。

善光寺如来は、その後、大井町金子に移され、相模善光寺として今なお最明寺の善光寺如来堂にまつられております。

寺の縁起によれば、元禄１３（１７００）年に善光寺如来を開帳してから後、十三年目の辰年に開帳することにして現在に至っています。

※別当…寺務を統括する長官に相当する僧職

往生要集

最明寺には、平安時代に書写された「往生要集」が伝えられています。

「往生要集」とは、比叡山の横川にある恵心院（現滋賀県大津市）の僧・源信が、多くの経典などから極楽往生のために重要な要素を３巻１０章に抜粋したもので、寛和元（９８５）年に成立しました。これにより人々の間で浄土へのあこがれが高まり、念仏や阿弥陀如来への信仰は盛んになりました。最明寺に伝来した「往生要集」が書写された時期は不明ですが、紙質や書風から１１世紀の後半とされ、３帖そろった完本として現在最古のものです。その重要性から国の重要文化財に指定されています。



国指定重要文化財　往生要集 上・中・下
平成元年６月 12 日指定